

# モデルフォレストの現状と展望

—1999年3月の三重ワークショップなどを契機に—

二 澤 安 彦

## はじめに

1999年3月23日～27日に伊勢市と宮川村を場に「モデル森林の推進に関する国際ワークショップ」の第2回会合として、「三重ワークショップ」が開かれ、私も参加させていただきました。この国際ワークショップは、わが国が、森林に関する政府間フォーラム（IFF）への貢献の一環として全部で4回の予定で開催しているものです。昨年3月の第1回ワークショップは東京で開かれました。三重ワークショップの主催は、林野庁と三重県、協賛は国連食糧農業機関（FAO）とカナダが主導する国際モデルフォレストネットワーク（IMFN）事務局でした。

この他、今度の三重ワークショップの最終日に披露されたのですが、本年度からの3年間日本政府から拠出されるFAOへのトラストファンドによって「アジア地域持続可能な森林経営実証支援計画」プロジェクトが開始されようとしています。

平成10年度林業白書では、「…我が国では、森林生態系を重視した森林整備のあり方を調査検討するため、平成8年（1996年）から、「北海道石狩・空知」、「高知県四万十川」の2か所をモデル森林に設定している。」と述べています。

私ども国際緑化推進センターでは、林野庁からの補助を頂いて、昨平成10年度からの5年間の予定で、「モデルフォレスト活動促進支援事業」を実施しており、ベトナム国とミャンマー国での支援実行を開始しました。

このように、モデルフォレストという言葉が最近よく使われ、実践も始まっています。

---

NISAWA, Yasuhiko: Present Condition and Prospect of Worldwide Promotion of 'Model Forests'—A Thought Brought about in Participating in the Mie Workshop—

(財)国際緑化推進センター

## I モデルフォレストとは？

世の中の事物にはそれぞれ呼び方がついているのは自明なことです。その場合、同類の事物を広く指す場合の呼び方と、他の同類と区別する必要がある場合の固有の呼び方の2種類があります。モデルフォレストの場合についても同じことが言えます。

一般的に言うモデルフォレストとは、他の場所に同じような森林を造り出すための模範的な森林と言う前提のもとに、次のようないろいろのものが含まれます。

- ・その土地の自然条件のもとで期待する最良の生物多様性を有し、立派な樹木の成育する天然林
- ・立派に成林した人工林
- ・森林からの木材などの生産が持続可能な形で行われている森林
- ・水源かん養、国土保全、レクリエーション機能などの森林の非木材生産機能が十全に発揮されている森林
- ・残存木や環境に与える損傷の度合いが最小で、後継樹がうまく育つような伐採・搬出方法がとられている森林
- ・森林に関係する人々や機関・団体との関わり合いが円滑である森林

すなわち、いろいろな意味で他の模範となっている森林が一般的な意味でのモデルフォレストです。

これに対して、‘はじめに’で紹介したモデルフォレストは、もっと絞られた固有の意味をもって使用されているようです。すなわち、上に列挙したもののなかで、特に最後に述べた意味でのモデルフォレストをさしているようです。

1998年3月に東京で行われた「モデル森林の推進に関する国際ワークショップ」では、その目的の第1がモデル森林の備えるべき要件・特質について討議し、意見を集約することでしたが、そこでは、とくに参加ということが強調されました。より具体的な議論の内容を知って頂くために、モデル森林の備えるべき要件・資格などについて、討議の結果として集約されたものを以下にあげます。

### 1 人と関連する要件・特質

- ・個人、団体、共同体等の意思決定過程へのパートナーとしての自主的な参加
- ・参加者の範囲は、森林利用者の幅広いニーズを反映すべき。無視されがちな貧困層、土地なし住民、女性の参加が重要。参加に不慣れな者に対する

特別なトレーニングや教育の必要性を認識すべき

- ・土地所有者，行政，産業界も参加すべき。現行の法制度の枠組みの下で，土地所有者の権利を尊重しつつその協力を求めるべき
  - ・国ごと，モデル森林ごとに異なるニーズや利害を反映した経営を行うべき：「モデル森林は，それぞれが独自のものである」
  - ・モデル森林は，人材育成，キャパシティ・ビルディングのための訓練センターである
- 2 モデル森林のねらいは実証・実演すること
- ・適切な森林の取扱方法を実証・実演すべき
  - ・技術移転のための情報共有と教育も重要
- 3 モデル森林は，現場レベルでの持続可能な森林経営を環境・社会・経済的な要請に合致する形で実践する場
- ・その経営目的，利用可能な資金，参加者の能力等に応じた経営形態をとるべき
  - ・参加者自身が定める経営目的の範囲内で，流域の管理を含む幅広い便益の実現を目指すべき
  - ・モデル森林の経営システムは，簡素，合目的，現実的，適切であるべき
  - ・可能な限り，森林を生態系として経営し，生物多様性を維持しうる経営システムとすべき
  - ・効果的な計画立案及び経営のためにはうらづけとなるデータと情報システムの構築が必要
  - ・経営等のシステムは，既存のシステムをもとにしてもよいし，新たなシステムを構築してもよい
  - ・経営等のシステムは，経営の規模に合致し，実証・実演機能を有し，他のケースに応用可能であり，継続的・長期的な改善プロセスを包含するものであるべき
- 4 モデル森林の経営を支えるための各種の活動
- ・研究・開発，訓練，広報・普及，地域・国・国際レベルでのネットワーク
  - ・森林経営の持続可能性の達成状況を計測するため，地域に適合した指標の策定が必要かもしれない
- 5 モデル森林は，国レベルの森林及び土地利用政策と関連したものであるべき
- ・モデル森林の目的が国レベルの政策に合致すべきだという観点から，トッ

プダウン方式の可能性

- ・国レベルの政策形成に貢献するという観点から、ボトムアップ方式の可能性

## 6 モデル森林の構造に関する特質

- ・柔軟かつダイナミックに変化するもの
- ・その機構構造は、土地の所有形態によって決まりうる
- ・地理的な構造は、流域管理を包含したものでありうる

多数の国、機関の人々によるワークショップでの各参加者の発言を正確に記録しようとするれば、総花的になるのはやむを得ないことですが、大観すれば、ここで言うモデル森林とは、その場所、その場所に適した形での持続可能な森林経営を達成するため、関係者の参加をキー要素とし、いろいろなレベルでのネットワークを通じ協力しつつ、地についての活動を行うことについてのものであると言えます。

国際モデルフォレストネットワーク（IMFN）を主導しているカナダのモデルフォレストについての考え方は、以下のようなものです。

世界の森林は、社会に対して社会的、経済的便益を提供し、水源のかん養、土地の保全、カーボンサイクル上の役割、生物多様性の確保などさまざまな役割を果たしている。しかし、世界的に森林の減少、森林生態系と森林の生産性の質的悪化と言う問題が顕在化している。

世界の森林の好ましくない現状を改善するためには、各国政府、NGO、産業界、原住民、森林周辺の住民コミュニティ、学界、森林所有者、一般市民などが、森林の環境保全上や、社会的、経済的役割がバランス良く発揮されるようにするため、協力していくことが肝要であり、そのためには国際的な政策上の合意、調整が必要である。同時に、政策を地についての形で実践することも同じく肝要である。そのための具体的な方法がモデルフォレストのアプローチである。モデルフォレストのコンセプトは、多様な役割を果たしている森林内や周辺に居住したり、その森林に関係するグループがパートナーシップを形成し、外部で関係するところとネットワークをつくって持続可能な森林経営を実現するというものである。具体的な活動は、行政やパートナー間の調整、経済的諸活動、適切な意思決定を行うための情報などのサポート活動、コミュニティレベルでの普及啓蒙活動、大学等との連携、経験や知識を内部的、外部的に共有するためのネットワーク活動などからなる。

カナダは、このような考えのもとに、3年半前から、その支援のもとで、オタ

ワの国際開発研究センター（The International Development Research Centre in Ottawa）内に国際モデルフォレストネットワーク（The International Model Forest Network, IMFN）を設立し、カナダの政府開発援助の枠組みのなかで、メキシコ、ロシア、マレーシアでのモデルフォレスト活動を支援するとともに、IMFNのなかに米国のモデルフォレストも位置づけ、東京や三重で林野庁等が主催した国際モデルフォレストワークショップのような活動にも積極的に参画しています（カナダのIMFNと日本のモデルフォレストとの関連については本稿の後の方でも述べます）。

なお、このような意味でのモデルフォレストにおいて、関係者間のパートナーシップづくり、参加がキーワードになっている背景には、私見では、次のような現状があると思われます。

今、森林の減少や劣化が顕著な熱帯地域では、森林あるいは森林減少・劣化と地域の住民などとの関係が密接・不離なものとなっています。すなわち、住民などとの関係を無視して良好な森林の成立はありえない状況にあります。例えば、熱帯の良好な状態の森林でも、それを経済活動に組み入れようとして道路が入ると、貧困層などの入り込みで森林が荒れてしまうということを繰り返しているというような現状にあります。

このような状況のなかで、唯一存在できるモデルフォレスト（広義のモデルフォレスト）は、地理的に到達不可能な場所に位置する原生自然状態の森林でしょう。ロシアなどの北方林についても同じことが言えます。

カナダについては、先住民との関係が、同国でのモデルフォレスト活動の背景に大きく存在しているように見えます。このような考え方で日本の2つのモデルフォレストを見ると、同じく私見では、若干位置づけがことなっているように思われます。すなわち、今の2つのモデルフォレストにおいて、どのような意味でパートナーシップが改善されるか、あるいは、本当にその喫緊の必要性があるのかといった点が不明瞭に思われます。従って、現在の活動はいわゆる基準・指標の現地での適用についての研究に重点が置かれています。

## II 三重ワークショップについて

冒頭で既に紹介したとおり、1999年3月に伊勢市、宮川村を場に林野庁等の主催で、昨年3月の東京に続く第2回目のモデルフォレストに関する国際ワークショップが開かれました。

ワークショップは、わが国が「森林に関する政府間フォーラム（IFF）」貢献

の一環として、全部で4回のシリーズで開催するものの2回目で、今回は地元三重県も主催者の1つとなり、カナダ国際森林ネットワーク (IMFN) と国連食糧農業機関 (FAO) が協賛しました。

今回のワークショップには、アジアを中心とする17か国、5国際機関、国際NGO、日本の関係者など約100人が参加しました。私も参加する機会を得ました。参加者はそんなに多くなかったのですが、歴史と緑にあふれた伊勢、宮川村の美しい自然、親切な人々のおもてなしのなかで、参加者がリラックスでき、意義のあるワークショップであったと思います。

宮川流域では、以前のようなきれいな水の復活、森林・林業の活性化を目指して上・下流の関係者が、行政と一体となって「宮川流域ルネッサンス事業」を行っています。これは、モデルフォレストという名前はついていないのですが、内容的には似たところが多いため、ここを場としてケーススタディ的な観点をもったワークショップを行い、参加者がそれぞれの立場から、ここを例としてモデルフォレストが持続可能な森林経営達成のために、果たす役割を考えることを目的としました。ワークショップのとりまとめは、同時に、参加者から三重県や宮川村への提言的メッセージとしての性格も持っています。

ワークショップの結果のとりまとめのうち、主なものには次のようなものが含まれています。

- ・持続可能な森林経営とその三重県レベルにおける発展への貢献

持続可能な森林経営は、広い意味で、財（木材など）やサービス（きれいで豊富な水資源など）を直接提供することを通じて、三重県の発展に大きく貢献できる。また、県民にたいしても、環境面、社会面、経済面で利益を幅広く提供できる。人々の利益は、森林の状態と不可分なのである。

モデル森林のコンセプトは、県レベルにおける持続可能な森林経営を実施するためのシステムを分析する方法としても優れている。

- ・宮川流域におけるモデル森林アプローチの適用は、ゼロから始まるという性質のものではない。なぜなら、宮川流域ルネッサンス事業によって、フレームワークが提供されているからである。すなわち、この事業が、流域のコンセプトや様々な土地利用上の問題点に対応していることに加え、すでに主な利害関係者をその枠内に取り込んでおり、地域社会の社会面、環境面に関する共通問題に対応するためのフォーラムも提供している。
- ・宮川流域の状況は、他の森林やモデル森林と同様に、地域に独特なものである。しかし、宮川流域の環境を構成する要素は、世界の他の森林地域と

同一のものである。具体的な要因としては、林業中心の上流地域、農村部から都市部への人口移動、外部効果の重要性（例えば、森林が下流への水供給に及ぼす影響や、世界の木材価格が地域の林業経済に及ぼす影響など）があげられる。

- ・持続可能な森林経営のためのネットワークは、様々なレベルで形成される。もっとも基本的なネットワークは地域レベルの関係者のネットワークである。地域レベルのネットワークでは、情報や専門知識の交換によりモデル森林全体に対して恩恵がもたらされる。

地域レベルのネットワークと同様に、全国的、国際的ネットワークを活用することにより、持続可能な森林経営を前進させることができる。IMFNの意義や、今回のワークショップの意義はここにある。

なお、三重ワークショップに続くモデルフォレスト国際ワークショップは、本1999年10月に、ネットワークづくりを主テーマに、群馬県で開催されることになっています。

### Ⅲ モデルフォレスト推進におけるIMFNと日本のイニシアティブの関係

モデルフォレスト推進上、IMFNとわが国のイニシアティブとの関係については、とくに海外に出た場合、よく受ける質問です。

IMFNの資料のなかには、日本の2つのモデルフォレストがのせられていることがあり、IMFNの傘の下に日本のイニシアティブが入っているとも見える場合があるからです。

カナダIMFNの方も、1997年のトルコ、アンタルヤでの世界林業会議の場での12か国の林業行政責任者の非公式なモデルフォレストについての会議でモデルフォレストの国際的な展開について意見の交換を行ったなど、いろいろな場で積極的にリードする気構えを見せています。

しかし、IMFNがカナダ独自のイニシアティブという基本的な性格をもっており、普通の意味での国際組織とは若干異なるため、わが国としては、それぞれのイニシアティブの長所を活かしながら双方が発展・充実を図っていくという立場をとっているというのが現状です。

東京ワークショップも、三重ワークショップも、2つのイニシアティブがうまく機能し補完しあえる実例を示したとも言えます。

FAOが積極的な姿勢で参画しており、有効なリンクピンの役割を果たしている現状にあることも評価して良い事実だといえます。

#### IV 国際ワークショップ以外のわが国のモデルフォレスト推進に関するイニシアティブ

わが国は、国際ワークショップの主催以外にも、モデルフォレストの推進に関する次のような活動を行っています。

##### 1 FAOへのトラストファンドによるプロジェクトの実施

農林水産省、林野庁は、本年度からFAOへのトラストファンドにより「アジア地域持続可能な森林経営実証計画」プロジェクトを実施する予定です。このことについては、既述のように、三重ワークショップの最終日に意図表明がなされました。このプロジェクトは、3年間の予定で実施され、アジア太平洋地域でのモデルフォレストのネットワーク形成を通じて、各国に於ける持続可能な森林経営の達成に貢献することを目的としています。

プロジェクトの開始は、今年秋ころで、コアとなる現地活動が行われる国は、今のところ、中国、タイ、ミャンマー、フィリピンが想定されています。

##### 2 国際緑化推進センターが、林野庁の助成を受けて実施中の、「モデルフォレスト活動推進支援事業」

この事業は、昨年度からの5年間の予定で実施中のものです。

住民など関係者の参加による持続可能な森林経営のモデルフォレストをアジアに広げていくため、一定の地域での活動を通じモデルフォレストのシステムをつくり、必要な人材を養成し、システムつくりのマニュアルを作り出すことが最終的に目指す成果です。

初年度は、メキシコ、ネパール、モンゴル、ミャンマー、ベトナムでの調査を行った後、ミャンマー、ベトナムの2国と協力し、プロジェクトを実行して行くことを決定し、両国とメモランダムを取り交わしました。両国とも、過去の計画経済体制から転換し、市場経済体制に移行していますが、森林経営については、参加という観点が乏しかったこと、両国とも人々の生活と森林・林業が密接に結びついていることが特徴です。

ミャンマーでは林業省森林局、ベトナムでは林業大学が実施機関です。

ミャンマーでは、バゴー山系、ベトナムではホアビン省が活動の場で、現在それぞれの森林の経営にどのような要素、人、団体・機関が関わっているかについての実体把握から活動が開始されています。

FAOへのトラストファンドによるプロジェクトの活動等とも必要な関係をとりつつ実行していくことにしています。